

篠原ユキオ

1948年 東大阪市生まれ
京都教育大美術科卒
京都精華大学名誉教授
(公社)日本漫画家協会参与
FECO JAPAN 会長

『獅子の子落とし』は実際には無いのだと聞いた。

昔から子供を厳しく育てることの例えに使われて来た有名な話だが、若干の共感部分はあるものの、現在の感覚ではやはり『児童虐待』という事になるだろう。

私は8歳の頃に父親が蒸発したことから実際には母子家庭として育った。

家族を捨てた父に厳しく躰けられたことは全く無く、記憶の中にある父はとても子煩悩だった。

野球や漫画や図画工作や昆虫採集など多くの豊かなシーンがいつも父の記憶の中にある。

今の私を形成する核となる要素は父親から与えられたものが多いように感じる。

そう考えると父の蒸発は私が必ず這い上がってくることを信じて崖から突き落したのかもしれない。

何くそ、あなたの見捨てた息子はこうしてその不幸をバネにしてアナタよりも立派に育ちましたよと、いつかは見せつけてやるのだと思わせてくれたのは、まさに『獅子の子落とし』だったのではないかと思ったりするこの頃である。



バンジージャンプ (F30号・部分)



F-50号

呼吸

サン・テグジュペリの『星の王子さま』を最初に目にしたのは大学4年生の頃だったと思う。ちょうど家内と付き合い始めた頃で、デートの時、彼女はいつもこの本を携えていたのを覚えている。「この本には素敵な言葉がいっぱい詰まってるんよ」そう言われたが当時の私は興味を持つことはなかった。それはお世辞にも上手とはいえない素人っぽい絵がその一因だったように思う。それをきっちりしたカタチで読んだのは、それから40年近く経ってから、家内が肺癌で59歳で他界した後だった。

『大切なものは目に見えない…』

星の王子様の巻頭に『象を飲み込んだウワバミ』の絵は読み手の感性を測るようには登場する。子どもの描く邪念の無い絵の本質を鋭く突いて、大人になるにつれどんどん失われて行く感覚の大切さを語りかけるのである。

これはどこかでヒトコマ漫画の世界に通じる感覚なのだが、意識して描こうとすると、明らかにわざとらしくったり、あざとい表現に見えてしまうものなのだ。伝えたい想いをぐっと溜め込んで、一気に吐き出すエネルギーが大切だと思う。

「お父さんは素敵な言葉をたくさん知っているのね工…」家内が死ぬ前にベッドの上で私に言った言葉が14年経った今も忘れられない。



地球のヒラキ

「腹を割って話す」という表現は和解や融和のスタートラインのイメージだ。それはお互いが歩み寄って問題の解決に向かうという希望を感じさせる。何事も話せば分かり合えると学校では教えられて来た。

それでも人類は数え切れないほどの失敗を経験し、その都度成長してきたと思っていた。しかし、今の世界の状況はそれが思い違いであったことを思い知らされている。メルカトル図法は丸い地球を平面で表現する描き方だがこんな姿になってはいけない。地球はやはり限りなく丸く収まる物でなくてはならない。



F-30号

鳩を放つ

繋がりを求めて

ノアの方舟はクリスチャンでなくともよく知られている話だ。海外の一コマ漫画のモチーフとしてもよく使われる。

私は小学生の時、通っていたプロテスタント系の日曜学校で、若い牧師から聞いた時の事を鮮明に覚えている。

中学生になって見た70ミリ映画ではリアルな映像場面に牧師から聞いた話のイメージがびったり重なって、大阪ミナミの映画館で、上映中に思わず大きな声をあげてしまった思い出がある。

神が乱れた人間世界をリセットするため、大洪水を起こして地上の全てのを水中に沈めた後、周囲の状況を知るためにノアは船上から空に鳩を放つのだが、今ならさしずめスマホ片手に、世の中の動きを観察する姿が目に見えぬ。

しかしよく考えると、世界が海の底に沈んでしまったなら繋がりがこないよなア…

名 刀

当たり付きのアイスクャンデーとの出会いは小学1年生の頃である。

『ホームランバー』というのが正しい商品名らしいが当時は『ホームランキャンデー』と呼んでいた。

その頃の価格は10円だったと思う。バーにはホームランの他に単打・2塁打・3塁打の焼き印があって、1点入るともう1本もらえるという野球仕立てである。

現在はいろんな関連商品にも使用されているらしいが、表示は単に『当たり』だけになっているように思うがどうなんだろう。

最近は多種多様なアイスクリーム商品が売られていて、見かける事も食べる機会もあまり無くなったが、あまりしつこくないシンプルな味が好きである。そしてこの漫画を書いた後、何よりも驚いた事は、このメーカーが『名糖』という会社であったという事である。



F-30号

窓



F-30号

イスラムの女性が着ている目の部分だけしか見えない服を『アバヤ』と言う。頭から被るだけのスカーフ風の布は『ヒジャブ』というらしい。

我々の目には奇異に見えるこの衣装を昔から多くの漫画家はモチーフにしてきた。一般的な民族衣装とは違って、戒律とされる宗教的な決まり事には第三者が安易に踏み込む事は出来ないが、ビジュアルとしては人間の様々な心理や立場を表現するのによく使われてきた。

『目は心の鏡』『目は口ほどにモノを言う』『目からウロコ』などなど、目を使った諺もたくさんあるが、いずれも身体の中でそれが一番に心を表すパーツである事を物語る。

イスラム圏では女性が運転免許を取る事が出来ない所も多いと聞く。

女性の見ている世界が極端に制限されている事は明らかだが、彼女たちが見る事の出来る世界もこのミラーほどだけのような気がする。